

「富戸の魚見小屋」

静岡県伊東市

富戸では、魚の事を「イオ」と呼び、「イオ」と言えばまずボラを指すくらい、ボラは重要な魚であった。江戸時代、富戸のボラは美味とされ、幕府と密接な関わりをもっていた。富戸から江戸までは押送船(オショクリブネ)で海路を運ばれていたが、浦賀の番所では、旗を立てて「富戸のボラである」と言えば無条件に通行できたという。

ボラは非常に俊敏な魚で、個人的な漁法では大漁が望めないのが、村中が総がかりになる必要があった。富戸のボラ漁法は、主に南潮(ミナミシオ)に乗って南下してくる群を地先の磯で捕獲する一種の敷網漁法であった。

富戸のボラ漁の対象は春ボラが主である。秋ボラは卵をかかえ春ボラの2倍ほどの体型になるうえ、動きが鈍く漁獲しやすいが、当時はカラスミの原料になる事がよく知られておらず、組織的な漁は行われなかった。

東の空が白むころから魚見(イオミ)の仕事は始まる。ボラの大群は、上から見ると海が赤くなるように見える。魚見場所は、富戸の北の川奈境から、村の地先までの間に数カ所設けられており、南下するボラの動きを組織的なチームプレイで伝達していた。合図(マネ)を送る場所でもあったのでマネバとも呼ばれ、この中では長作(ナガサク)、乗口(ノリグチ)、先山(サキヤマ)の3カ所が重要であった。

長作は富戸地先に入ってくる魚群を発見する最前線基地であり、蕙(むしろ)旗を上げて魚群発見を知らせた。魚体の数が少ないときは1枚、船一艘以上と思われる時は2枚を合図として上げていた。

乗口からは海岸線全体が見渡せるので、長作の合図を双眼鏡や肉眼で確認して、漁獲が少ないと見込まれる場合は「小網」、大漁の場合は村中「総出」の指示を、先山と集落にホラ貝や旗で指示する。

先山は、漁期になると建てられる杉皮葺きの臨時魚見場所で、合図をうけると、網を張ったり投石したりして魚群を湾に追い込む。その間に敷網を持った船が到着し、湾からUターンしてくる魚群を捕獲した。

明治時代になってからはイルカの追い込み漁が盛んになったが、ボラ漁で培ったチームワークと機動力がここでも活かされたようである。なお、乗口にある魚身小屋は静岡県の有形民俗文化財に指定されている。



乗口の魚見小屋

みどころ



- ぼら納屋：魚見小屋と同じくボラ漁に関係する施設で、ボラ漁の基地となった場所である。主に、ボラ漁の船を収納したり、漁具の修理をしたり、炊事をした作業小屋として使用された。現在は茅葺屋根の作業小屋を活かした磯料理の食事処となっている。
- 城ヶ崎海岸：今から3700年前に噴火した大室山の噴火活動によって流出した溶岩が海に落ち込んでできた海岸。全長約20kmに及ぶ海岸線には、自然散策路が設けられ、そこを歩けば、青い海と季節が織り成す花々をはじめとした自然を満喫できる。また、富戸漁港からは観光遊覧船が運航されており、海岸地形を海から見るができる。